クリスマス

グランシェス(エドワード)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クリスマス

【Ｎコード】
Ｎ４７９３Ｐ

【作者名】
グランシェス（エドワード）

【あらすじ】
クリスマス、俺にとっては・・・地獄だ
俺、古藤（こどう）　悠一（ゆういち）は過去にクリスマスに苦い思いをしている
そう・・・こいつ、西金　ミリア（さいがね　みりあ）によって・・・
・
そんな俺に再びクリスマスがやってきた
意外な結末?！

ありそうな話に共感も？

２０１１／０２／１４

ＵＵ５００人突破～

（前書き）

シリーズ「俺の彼女はツンデレお嬢」

設定

古藤　悠一（こどう　ゆういち）

高校生以上の男性

不良っぽいがミリアに振り回され気味

西金　ミリア（さいがね　みりあ）

悠一と同い年の女性

お嬢様だが悠一と幼馴染で従兄弟や甥、姪が多い

悠一を振り回し気味だがそれには意外な真実が・・・

２０１１／０６／３０に

閲覧回数２５００回突破

閲覧者１０００人突破

皆様の愛読に感謝します

クリスマス、俺にとっては・・・地獄だ
俺、古藤（こどう）　悠一（ゆういち）は過去にクリスマスに苦い思いをしている
そう・・・こいつ、西金（さいがね）　ミリアによって・・・
そんな俺に再びクリスマスがやってきた

２０ＸＸ年１２月×日
今日はクリスマス
俺は幼馴染であるミリアに強引に買物に付き合わされている
悠一「お～ぃ、ミリアいい加減帰ろうぜ」
俺は前が見えない程荷物を抱えている
だから早く帰りたいのだ
ミリア「ダメ、後○○堂に行ってパーティ用の買物して××園で服を買って・・・」
聞いただけで疲れる程の店の件数だ
これでは今日、１日帰れるか不安だ・・・
悠一「ミリア～、次の店で少し休憩させてくれ～」
俺はヘトヘトになりながらミリアに言うが
ミリアは聞こえていないのか返事がない
悠一「うぅ・・・これじゃ、俺が死んじまう・・」
そんな事を呟いているとミリアを見失った
悠一「あれ？　ミリアの奴・・・何処行ったんだ？」
俺は荷物で見えにくい視界からミリアを探す
ミリア「何やってんのよ？　はい、これも持って」
後ろからミリアの声が聞こえた
それと同時に背中に何かが当たる
俺はゆっくり振り返ると背中に当たった何かが俺の持つ荷物の上に

乗せられた
悠一「ミリア～、一旦帰ろうぜ・・・じゃないと俺が死んじまう」
俺はミリアに必死に頼んで一旦帰る事になった
ミリア「まったく、だらしないわねぇ悠一は」
だらしない以前にこの量を買うお前の方がどうかしている
そんなこんなで俺たちは一度ミリアの家に戻ってきた
悠一「は～、疲れた～」
俺は山積の荷物を玄関に置き荷物の隣に座り込む
ミリア「だらしない、これじゃパーティなんて出来ないわよ？」
そう言われても俺にはパーティよりも
朝から一人買物に付き合わされている方が疲れる
悠一「しっかし、急にパーティなんてどう言う風の吹き回しだ？」
俺は見上げてミリアに聞く
何せ、今までパーティなんて開かなかったこいつがいきなり開くなんて言うからだ
ミリア「それは・・・秘密・・・それよりもいつまで休んでいるつもり？」
ミリアは俺を足で小突きながら睨みつけている
俺は仕方なく立ち上がった
ミリア「さぁ、また買物に行くわよ」
俺の腕を引っ張りながら再び買物に行くミリア
俺はヘトヘトで逆らう気力すら残っていない状態だ

もう一度戻ってくる頃には夜になろうかと言う空だった
再び戻ってきた俺たちは荷物をパーティ会場に運び
飾り付けとかを始めた
まぁ・・・俺はダウン寸前だった
ミリア「早くしなさいよ、パーティまで2時間も無いのよ？」
悠一「うぃ・・・」
急かされて俺はパーティの準備を急ぐ

ミリアはと言うと急かしながらも料理をゆっくり作っている
悠一「呑気に料理かよ・・・」
俺は小声で呟いた
ミリア「何か言った？」
恐ろしい程の地獄耳だ
そう思いながら俺は何でもないと言い作業を続ける

なんとかパーティの準備が終わる
ミリア「お疲れ様、はい」
ミリアは何か飲み物の入ったコップを差し出している
悠一「あぁ・・・あんがとな」
俺は渡された飲み物を一気に飲み干す
悠一「うぇ・・・なんだこれ」
俺は顔をしかめた
ミリア「何ってうちの特製ドリンクよ？」
そう言ってミリアは平然と飲む
悠一「特製って・・・こんなんだったか？」
俺は以前飲んだ時よりも苦かったので首を傾げる
ミリア「疲れていると苦く感じるみたいよ？」
そう言ってコップを置きミリアは何か準備を始める
悠一「何やってんだ？」
ミリアの準備している物を横から覗こうとする
しかし、見えない
ミリア「ん～・・・これが良いわね、はい」
渡されたのはトナカイの着ぐるみ
悠一「俺にこれを着ろって言うのか？」
俺は引いてしまった
渡されたトナカイの着ぐるみはこれでもかってぐらいに派手だからだ
ミリア「そうよ？　もう少しで従兄弟や甥、姪が来るんだから」
俺は納得した

こいつの従兄弟や甥、姪はまだ幼稚園や小学2年くらいが多いからだいや・・・それでも地獄には違いない
それを見ているとドアチャイムが鳴る
ミリア「あら、来たのかしら？　悠一は早くそれを着て準備しなさいね」
ミリアが玄関に向う
俺は衣装に引きながらもミリアの言うことを聞かないと
酷い目にあっているのを思い出して身震いをした
嫌々ながらも衣装を着る
するとミリアと一緒に子供がたくさん入ってきた
ミリア「じゃあ皆はあのトナカイとしばらく遊んでいてね～」
子供たちが返事をするとミリアが『後はよろしく』と合図をして
何処かに行ってしまった
悠一「ミリア、そりゃないぜ・・・」
俺は小さく呟くと子供たちに襲われた

しばらく子供たちの相手をしているとミリアが戻ってきた
悠一「ミリア～助けてくれ～」
情けなくも俺はミリアに助けを求める
視界が悪い着ぐるみの関係でミリアが来た事以外わからなかった
ミリア「みんな～トナカイから離れてね、これからパーティを始めるわよ」
その掛け声と同時に子供たちがミリアに集まる
俺はやっとの思いで立ち上がり着ぐるみの視界に合わせてミリアを見る
悠一「み、ミニスカサンタ？！」
大声で驚いてしまった
その姿は・・・それこそサンタなのだが
ミニスカでミリアらしからぬ姿だったからだ
ミリア「それじゃあ、サンタさんからプレゼントを渡しま～す」

その掛け声で子供たちのテンションがピークを迎えた
プレゼントに喜ぶ子供たち
そしてパーティはあっという間に終わった

子供たちが帰り会場の片付けを終え俺はベランダでタバコを吸う
悠一「うぇ～・・・今年も地獄だったな・・・」
そんな事を呟いていると食器類を洗い終えたミリアが出てきた
ミリア「もぅ・・・またタバコ吸ってる・・・」
ミリアは呆れた顔で近づいてくる
ミリア「私たち未成年なんだから・・・辞めなさいよ」
そう言ってタバコを取り上げられてしまった
悠一「タバコくらい・・・いいだろ・・・」
俺は取り上げられたタバコを奪い返すと再び吸い始める
そして、遠い空を見上げて思う
悠一――（そろそろ帰るか・・・）
そんな事を考えていると吸っているタバコを奪われた
ミリア「もぅ・・・いい加減にしないよ」
ミリアにタバコを奪われて
俺はミリアの方向に向くといきなり唇に感触がした
目を開けるとミリアが目の前にいた
ミリア「もぅ・・・」
ミリアの顔が赤い
俺は混乱してしまった
ミリア「クリスマスに私がなんで悠一ばっかり誘っているかわかる？」
そう言われて考える
確かに仲のいい奴は多いはずのミリアが
なんで幼馴染の俺だけを誘うのかイマイチわからなかった
ミリア「鈍いんだから・・・」
そう言って再びキスをされた

ミリア「私は悠一が好きだから毎年クリスマスに誘っていたのに・・・」
照れくさそうに顔を背けるミリア
俺は混乱していて何も言えなかった

その日、俺はミリアの家族の誘いもあり家に泊まる事になった
翌日、あまり寝れなかった頭で改めて考える
悠一「やっぱり・・・そう言うことなのか？」
少し後に俺はミリアに尋ねると
ミリアが赤い顔をして俺のみぞおちを殴った

そんなこんなで今年、俺は何かを得たような気がした

（後書き）

短編第3弾
とりあえず季節物のネタに挑戦してみました
ツンデレな幼馴染に告白されるまで
と言う設定ですので短い方だと思っています
主人公が若干不良君ですが
何故最後の方だけでタバコなんだ？ってなりそうなのでここで説明します

最初の方では吸う暇すら与えられないほどミリアが強引だった為ですw
パーティの時はタバコを吸うと子供が暴れる事を知っていたので吸わなかったのです
それと吸う以前に子供に教われてますw

もうちょっとツンデレを濃くしても良かったかなぁ・・・って思いますが
季節物としてやっているのでこれくらいで許してください

さて、ここまで読んで頂きありがとうございました
他の作品もよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4793p/

クリスマス

2011年10月8日12時29分発行